

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 20 日現在

機関番号：14503

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24653195

研究課題名(和文) 被虐待児童への愛着形成を目的とした動物介在療法に関する研究

研究課題名(英文) Research of animal assisted therapy with dogs for the purpose of attachment formation of abused children

研究代表者

海野 千畝子 (Unno, Chihoko)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・准教授

研究者番号：30584875

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、情緒障害児短期治療施設の被虐待児童を対象とした動物介在療法(ドッグプログラム)を愛着形成という側面から臨床的に検討した。ドッグプログラム前後において児童の情緒と行動の様相を比較した。

結果、本来の施設側の治療に加えてドッグプログラムを行った介入群の児童らと施設側の治療のみの介入無群の児童らとの群間比較で、児童らの愛着形成を阻害する解離症状の数値は、介入群がドッグプログラム前後で有意な差を認めた。犬との安全な皮膚接触を通じた触れ合いを含むドッグプログラム(DOG-P)が、被虐待児童らの解離された感覚を統合し、必要な愛着形成を促進することが示唆された。

研究成果の概要(英文)：In this study, the animal assisted therapy with dogs for the purpose of attachment formation of abused children was clinically examined. The method employed was the qualitative and quantitative control study comparing pre and post AAT intervention looking at abused children's behavioral and emotional aspects.

The result indicated that the experimental group, compared to the control, showed significantly lower level of dissociation (which disturbs the formation of attachment) in the pre-post comparison. It is possible that the necessary attachment formation and sensory integration can be facilitated through this dog program (DOG-P) that includes secure touch and bonding with dogs.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学 ・ 臨床心理学

キーワード：被虐待児童 情緒障害児短期治療施設 動物介在療法 心理療法 解離 愛着

### 1. 研究開始当初の背景

今日、被虐待児童への心理療法は、被虐待児童の特質に翻弄され有効で確固とした治療や支援方法は探索段階にある(村松,2013)。被虐待児童は、虐待を受けた影響から解離症状を引き起こし、安全な環境に保護された後様々なフラッシュバック等の行動を表す(海野 2007)。結果的に、この解離症状により、施設職員との十分な信頼関係を構築することが邪魔され、愛着形成が阻害される現実がある(海野,2008)。われわれは、重篤な虐待を受けた児童、知的障害が存在する児童らの治療が、停滞する、中断する等、をいくらか経験した。本研究においては、情緒障害児短期治療施設(以下 A 施設と略記)の被虐待児童を対象に犬が存在する中で心理療法(動物介在療法)を行い、解離症状の緩和と愛着形成を目的としたドッグプログラム(以下 DOG-P と略記)を実践した。

### 2. 研究の目的

被虐待児童は、人的接触に特に留意する必要がある(杉山,2007)。人的接触が引き金体験により、過去の児童が受けた虐待等の被支配体験と類似の行動(再演行動)が現実に入(フラッシュバック)し、暴言や暴力、自傷行動、性的加害行動等、様々な解離症状を中心とした負の行動を表す(海野,2010)。

しかし、健康な愛着形成には人的接触を欠くことができない(Jamus,1994)。そこで本研究では、人間との関係以前に、人間との本来友好な関係を築く素質がある犬との接触を活用した動物介在療法(ドッグプログラム:DOG-P)を行い、DOG-P が被虐待児童の解離症状を緩和し、犬や人間との愛着形成を促進する、という仮説を実証することを目的とした。

尚、犬を活用した被虐待児童への動物介在療法は、海外における有効性は認められている(Fine,1988)が日本においては皆無である。

### 3. 研究の方法

研究方法としては、次の2つの調査を実施してDOG-Pが被虐待児童の愛着形成に寄与するかを明らかにする。

#### (1) 量的調査

DOG-P介入群、介入無群ともにDOG-P開始及び終了の時期に、子どもの解離評価表(F.Putnam)(child dissociative checklist (CDC),Version3.0)以下CDCと略記)を施設職員に実施し評定した。CDCは、被虐待児童に特徴的に観察される解離症状を他者(施設職員)評定する尺度である。CDCの数値を量的指標とした理由として、愛着形成の程度の数値化は困難なため、愛着形成を阻害する要因となる解離症状の程度(海野,2007)の減少が、愛着形成を促進する指標になると判断した。また介入群においては、DOG-P開始後の2か月時点でCDC評定を追加した。各群においてDOG-P前後のCDCの値にt検定を実施し、群間比較をした。

#### (2) 質的調査

DOG-P終了後に施設職員らへのインタビューを実施し、DOG-P介入群と介入無群の児童らの行動観察の比較により、DOG-P実施前後の愛着形成の様相を聞き取り内容分析した。また、DOG-Pにおける対象児童の臨床面接の事例の経過を臨床的に考察した。

#### (4) 介入の実際

##### 対象施設の特徴

研究の対象施設のA施設は、情緒障害児短期治療施設である。児童福祉法によれば、情緒障害児短期治療施設とは、社会、心理的に不適応を抱える児童に対して療育、治療、教育が連携をとりながら、児童の成長・発達を促すことを目的とした施設、であり治療施設としての位置づけがある。A施設は、郊外の静かな住宅地に立地し、在籍児童数は35名(6歳から18歳)。被虐待児童は9割(91%)に及んでいる。特徴として、同じ系列の中舎製の養護施設が隣接している。施設心理士は5名在籍し、施設内児童への心理治療と並行して児童の生活にも携わっている。施設の外飼い(犬小屋)の柴犬とのミックス犬、呼称ジュニア(雌)12歳がいる。われわれは、対象施設の選定にあたり、訪問型のプログラムであるDOG-P実施後の児童らに予測される犬に対する喪失の溝を埋める意図で、飼い犬がいる施設を選んだ。

##### 対象児童

対象児童は、A施設の被虐待児童(小学生女児)6名(初回平均年齢9歳)である。犬アレルギー、犬恐怖症、等が無いことを考慮して、3名をドッグプログラム(DOG-P)介入群、3名をドッグ介入無群とし、3名のドッグ介入群にドッグプログラム(DOG-P)を実践した。

##### 対象犬の属性

犬の属性については、筆者飼育犬10歳のシズ-犬(雄)、呼称はトムトム、である。カナダ、アルバ-タ州エドモントンの被虐待児童への動物介在療法施設(Dream catcher :Http参照)の動物評価者Danielle Clark氏により適正を判定されている。犬の選定の基準としては、筆者との愛着関係が安定し、より性格的に穏やかで安全な飼い犬を選んだ。

##### 倫理的配慮

研究実施に当たり、大学の倫理委員会に申請して許可を得た。犬は、健康面で心配ないことを含む獣医による健康診断書を持参した。当該A施設所属長、本人の所属児童相談センタ-長に研究の意図を説明して同意を得た。また介入群の児童には、DOG-P参加にあたりDOG-Pの説明と同意をとりかわし、同意実施を確認の上氏名等の記入を求めた。尚、本文中の事例に関しては、個人が特定できないように変更を加えている。

##### DOG-Pの実際

DOG-Pの目的は、犬との触れ合い(タッチング)を含んだ心理療法を実施することにより、児童が、自己の身体感覚や感情を確認し、愛

着形成に必要な感覚統合を促進することである。

DOG-P の構成はグル - ププログラム (以下 G-P と略記) と個人プログラム (以下 I-P と略記) に分かれている。G-P は、初回と最終回に行い、その間の 2 回目 ~ 13 回目を I-P という構成である。DOG-P の感覚は 2 週間から 4 週間に一回という間隔で、A 施設側の行事等を優先して日時を決定し、筆者 (以下訪問心理士) と対象犬 (トムトム) が訪問して実施した。

G-P の参加者は介入群の児童 3 名と対象犬 (トムトム)、施設職員 3 名と筆者 (訪問心理士) である。対象犬を真ん中に囲み、丸くなって座る (写真 1)。環境的配慮として、DOG-P は A 施設の普段の心理治療場所と異なる特設セラピー - ルームで行い、ウレタンマット、ホワイトボード、色鉛筆、感情カード、等施設職員の創意工夫で構造化した。

初回の目的は、児童が犬との適切な距離と関わりを学ぶ心理教育を行うことで、今後、動物介在療法の個人プログラムに入る構えを作る、ことである。児童の課題は、トムトムと仲良くなろう、トムトルールを知ろう、とし、児童らは、適切な触り方 (タッチ)、抱っここの仕方、エサのあげ方、リードをひいて歩き方等、を学んだ。最終回の目的は、児童がプログラム全体を振り返り、犬への愛着を確認し、未来に自分が犬と生きている絵を描くことで未来の鑄型を作る、ことである。

I-G の目的は、犬の介在する中で被虐待児童への心理療法 (インタビュー面接、思春期解離体験尺度 (A-DES) の変法、生育史聴取、EMDR) の実施により、虐待により切り離されていた意識、記憶、感情、身体感覚を確認し、愛着形成に必要な感覚統合を促進することである。インタビュー面接、思春期解離体験尺度 (A-DES) の変法の心理検査等の実施は、児童の状態像の概観の把握と安全な治療計画づくりを目的に行った。また、生育史聴取の中では過去の記憶を想起しながら RDI (resource development and Installation: 資源の開発と植えつけ) と EMDR によりトラウマ処理を試みた。

I-P の参加者は、対象犬トムトムと、筆者 (以下訪問心理士と略記) と対象児童 1 名、と施設職員 (施設指導員または施設心理士) 1 名の 4 者である。施設職員は、距離をとった後部ソファで座り、児童からの促しには受容的に対応し、主体としては危険が生じない限り静観の姿勢をとった。

犬は、訪問心理士の近くの用意した安全な 2 つのビーズクッションやセラピー - マット、施設職員の隣に寝そべる等、リードはつけたまま自由に動き回れる状態にした。

児童へのルールは、1 . 自分や犬や人にけがをさせない 2 . ものを大切に使う。3 . おもちゃはもとあったところに戻す、4 . 時間を守る (45 分)、である。

訪問心理士から、I-P の初回に、怖くなったり

不安になったりしたら、トムトムを見たり触ったりしていいよ、と伝達した。またインタビュー内容に、飼い犬がいた等の経験や犬から咬まれた等の被害経験、犬への加害経験等の有無について聞いた。

一連の I-P 経緯は、対象児童は、犬と訪問心理士がまつ部屋に該当施設職員 1 名と出向き、挨拶して犬と接触 (タッチ) 後に自己の指定された席に着く。絵 (自由画) を描きながら、前回の I-P の記録を振り返り、記憶を繋ぐ。続いて本日の課題 (例として、幼稚園年少組時代の快不快な思い出を交互に想起し語る) にとり組む、必要に応じて出現したフラッシュバックをボディワークや RDI (resource development and Installation: 資源の開発と植えつけ) (海野, 2011)、また犬との触れ合い、等により立て直す。終了時刻になり後片付け実施後、犬にエサ上げ、抱っこする等、接触する。I-P の混乱が、生活に侵入するのを防ぐコンテインメント技法の呼吸法と性的興奮を鎮めるボディワーク (海野, 2010) 等を実施し、当日担当施設職員から飴を一つもらい、対象犬と握手後に施設職員と退室する、という流れである。

訪問心理士は、毎回、DOG-P 終了後に施設職員とコンサルテーションを行い、相互に情報交換すると同時に対象児童の行動の意味を伝達した。また、対象児童らは、毎 DOG-P 終了後の夜に振り返り作業を施設職員と行い、感情や身体感覚を確認した。

#### 4 . 研究成果

##### ( 1 ) 量的調査結果

CDC 得点に対応のある t 検定行ったところ、介入群は DOG-P 介入前 (M=9.33, SD=5.13) 介入後 (M=8.00, SD=4.00) で 5%水準において t 値 0.313 であり、介入無群は、介入前 (M=13.00SD=2.00) 介入後 (M=12.33, SD=5.50) で t 値 0.192 であった。介入群と介入無群の群間比較において介入群に有意な差が生じた。

また、DOG-P 介入群の開始後 2 か月時点での CDC の数値は増大し、その後、解離症状が消失、復活と循環した。DOG-P 終了後の時点で数値は低レベルで落ち着く、という変動の経過をたどった。このことから DOG-P が児童の身体と情緒に変動を与え、感覚統合が促進することが示唆された。

##### ( 2 ) 質的調査結果

施設職員へのインタビュー - 調査の結果、介入群の児童は DOG-P 後に、対人関係や愛着形成に正の反応が出ていた。施設心理士へのインタビュー - 結果の例を挙げると、介入群児童は、家族の話を担当職員や施設心理士に不快なこと、怖かったこと等をためらいなく避けずに話す、介入無群においては、家族の話を施設職員には話さず、子供同士で話し、互いに混乱して終わる状態が観察された。甘え方は、介入群においては、自然な甘え方で抱っこしてといい、と問いかけ、強引ではなく、抱きつき方も力が加わりすぎても、ペタペタし

すぎてもない程よい甘え方ができていた。一方介入無群では、強引に施設職員にしがみつき、今じゃなければ、といらいらした施設職員を振り回す甘え方になっていた。A 施設の外飼いの犬ジュニアへの接近接触の仕方に、群間差があった。介入群は施設の犬といることが多く、存在の仕方は、安心して傍にいて、そこに身をゆだねる感じの印象をもつ。一方、介入無群は、施設の犬の傍にいない。介入群は DOG-P で犬に触るからか、縫いぐるみを何か怖くなった時にぎゅっと抱きしめていた。今まで決して甘えなかった子が DOG-P の後、甘えるしぐさが増えた。表情も穏やかで和やかさがある。介入無群では、部屋やベットにぬいぐるみを並べるが並べているだけの存在である。自己の不安や恐怖に対して、施設職員が気づくように音をたてて物に当たる、等、言語を通さず歪んだわかりにくい形で表現する。介入群は、相手が嫌だと思ふことを受け入れやすい、嫌だよ、と職員がいうと、うん、わかった、と引き下がる。状況の読み取りや自己と他者の領域の差異を理解できている。介入無群では職員が嫌だった、と発言しても受け入れられない。介入群では人の物をとることが無くなっている。物理的・心理的にも自己と他者の所属物の区別ができている、等が観察された。以上、介入群と介入無群との情緒や行動観察の内容分析の比較結果から、介入群がより施設職員との愛着形成が促進されたと考えられる。

### (3) 事例研究 (事例提示 症例 A)

介入群の DOG-P に参加した児童の事例を記す。詳細は変更を加えている。

児童 A, 7 歳女児, A 施設の入所経緯は、弟と共に 6 歳で入所。父母は覚醒剤所持で服役中、母は入院していると A は認知している。G-P 初回においては、犬の存在に対してハイテンションでネームカードを股間に貼り付ける、性的部位の俗称を叫ぶなど性的モードが続出していた。しかし、犬との距離のルールづくりの為、座ってトムトムを抱きしめた瞬間に 10 秒の沈黙があり、A の表情が穏やかに鎮静化したような印象を受けた。

I-P においては、開始当初に訪問心理士から (不安になったり、怖くなったしたらトムトムを見たり、触ったりしていいんだよ) と伝達する。「こらトムトム、お前このバカ」と悪態をついたり、「かわいい~チュ~したい」と不自然にかわいがったりと両極端のスイッチング (部分人格の交代現象) (F・Putnam, 1997) が出現する。時折アハン、ウフンとピースクッションに寝転んで喘いでいる。ラブホテルに軟禁状態でいた時期があり、その時の父母の性的交流の目撃をしている。性的なフラッシュバックでハイテンションになるため、性的興奮を鎮めるワーク (海野, 2010) を促し深呼吸して立て直す。

解離のアセスメント (A-DES) では、白い服を着た女の人が見える怖い、と解離性幻覚が出現している。悪夢があり、内容を問うと「知

らない男の人、殺されてつぶされる、転んでのっかる、いやん、チュ~死ぬ、」とつぶやく。生育史聴取に入り、乳児期の母子手帳を確認して、対象犬 (トムトム) の乳児期の写真を見る。(トムトムはお母さんと別れた時にどんな気持ちだったかな?) と訪問心理士が問うと、「きっとさびしかったと思うよ~。」と A。(A はどうだったかな?) 「さびしいよ~... ママ手紙をくれる。」と寂しさをバタフライハグ (胸に蝶のように腕を交差して交互に鎖骨をタッピングして自己をなだめる悲哀を乗り越える EMDR テクニック) で処理をする。幼児期時代では、父親が A に暴力 (パンチとキック) を行った話をきき、訪問心理士がクッションに怒りを出すことを促すと「怒っている、もう怒っている、パパむかつく。ザケンジャネ~」とクッションを踏みつぶす。母親は優しい、と怒りは出す必要がない、と促しを拒絶したが、父への怒りを表出した後、「ママもクッションちょっとやる。」とボカスカとクッションをけり、並行して EMDR による怒りの表出をした。深呼吸した後、一緒にいた男性指導員に「パパ折り紙どっちがいい。」との良い思い出が現実に表出される。トムトムは少し離れて座り A を見守っている。セッション途中で、A がトムトムに軽く蹴りをいれたため、ルールを確認のため、訪問心理士が制して手首をつかんでルールが記載されたボード周辺に連れて行くと、A が手を振り払い部屋から飛び出す。施設職員が追いかけると、ドアから離れずに「うちは前にも手首をつかまれていたかった。パパも弟にした」と伝達し戻ってくる。通常通り、トムトムと握手をして餞をもらって帰る。I-P の最終回は、「トムトムみたいに守ってもらいたかった、小さいとき毎日キックパンチでパパママ抱き合ってた嫌だった。」という。G-P の最終回では、未来の犬と生きている絵を「大きくなってトムトムみたいにやさしい犬と散歩しているところ」を描画して終了する。

### (4) 成果の考察

#### ドッグプログラム (DOG-P) の意味

#### 1) 安全感的確立

デルタ協会 (2007) によれば、犬の効用には、次のことがあるという。1. 受容・共感的素質を持ち、即時のラポール可能、2. 物理的な接触のぬくもり獲得、安全なスキンシップ、3. 生理的利点、心拍数・血圧の低下によるリラクセス、過覚醒の解除、4. エンターテインメント性、しぐさ等で笑い獲得、等である。被虐待児童にとって、犬 (トムトム) の存在はどのように見えていたのだろうか。Herman, J (1992) によれば、被虐待児童への治療の段階の第一段階に安全感的確立、を提唱している。人間への不信感を課題として持つ被虐待児童は、適性を保持した犬 (トムトム) を自らに危険を及ぼさないもの (吠えない、咬まない、多少のことでは驚かない、言語を持たない存在性) として、時間的経過と共に

認識し、安全感を持ち安心して心理療法に臨めたと推察される。

対象児童らは、DOG-P の経過中に犬との接触回数が増え接触範囲が増大した。また、途中で飛び出しや抵抗は観察されたが、枠組みからはみ出しすぎず対象セッション総てに出席可能であった。DOG-P の犬の存在が、被虐待児童の過去を振り返る生育史聴取におけるフラッシュバックを緩和し、不快耐性枠を広げたと推察する。

## 2) 犬が愛着形成と喪失感の補充する役割

DOG-P の存在は、対象児童らに「トムトム」という総称となり、「今日トムトムの日だね、今度いつトムトムあるの?」と担当施設職員らに問う姿が頻繁にあった。児童らは、犬の存在を認知し、イメ - ジを胸中に納めていた。DOG-P 終了後、児童らは「トムトムに会えなくて寂しい。」と悲哀感情を表現し、苦難に際しては「トムトムが心にいるから大丈夫。」と施設職員に話した。健康な愛着とは、その者のイメ - ジが心の中に住んでいることであり、その心像に慰められ日々の現実の苦難を乗り越える能力である(海野, 2007)。児童らは犬の存在を信頼し、犬(トムトム)との愛着関係を基盤として人間(施設職員ら)と愛着を結ぶ課程を体験した。犬の存在性が対象児童らの愛着形成に寄与したと考えられた。

また、対象児童らの喪失感を扱う具体であるが、犬は母犬と別れて飼い主の犬となり、総ての犬が別れを経験している。一方、被虐待児童らにとって、生育史における乳幼児期から健康な実父母と出会えないことは喪失体験以上の外傷体験になりうる。対象児童らは生育史を振り返る中で、犬の母犬との別離体験に思いを馳せ「トムトム寂しかったと思うよ。」と悲哀感情を表現した。被虐待児童の傷つきの複雑性から、直接的に父母との喪失に向き合う際に表現が困難な児童が、犬の喪失感情を取りあげた後には、自らの悲哀感情に向き合った。犬の存在を児童らが、自らの同士として認識しその過程を媒介として喪失感を補充したと推察する。

3) 解離症状の緩和、現実への引き戻し  
DOG-P において、対象児童らの CDC に現れた解離症状は、生育史の聴取に入る 2 か月頃より上昇して、個人の症状はピークとなった。その際、児童らの生活にも、退行現象、指示入りが困難等、が観察されたが、担当の施設職員を通して、今生育史の聴き取り実施中のため、退行して症状をだしている。これを新規まき直しの機会と捉え、対象児童らに手厚く接してほしい、と施設内に対応を周知した。また、訪問心理士は、児童らに、悪夢や解離性幻覚の意味を捉えなおす心理教育に並行して医療的配慮を施設側に依頼する、パッチフラワ - レメディの肝油 (Kylie et al., 2009) にて睡眠を促す、等を実施した。

セッション内における解離症状に対する犬の役割は、現実への安全な引き戻しの担い

手である。対象児童らが、過去の話を引き金に過去の虐待行動を再演するフラッシュバックが出現し、暴れモ - ド、拒絶モ - ド、いきりたちモ - ド、すねモ - ド等、不機嫌な症状が表出した際、程よいタイミングで犬(トムトム)が何らかの行動を引き起こし、また児童らが気づくことで、セッションの方向が建設的に促された。

ビ - ズクッションに穴掘りをする姿をみて笑い、共に児童も穴を掘る、「トムトムくさいね ~ 犬の臭い」とトムトムのフサフサした毛を触りながら鼻をつまむ、対象犬がク - ンとなく寂しげ声に自らを投影して「トムトム寂しいのかな。抱っこしてあげて」と慰め、その他、対象犬が足で頭を搔くしぐさや、適度な固さの豆球に触れ「おもしろい ~ 豆球気持ちいい ~ 」と指の間をつつき微笑む等、五感を通した犬との関わりが、過去の不快な体験から、現実に呼び戻され安全感を取り戻す作業をしていたと推察する。

更に、メカニズムとしては、犬を見て触る体験が、虐待や喪失体験等のトラウマ記憶に向き合う不快さを適度に持ちこたえて治療が可能になる(山口, 2013)、という。

人間は苦痛な体験を、逃げるか戦うかの逃走闘争反応または、その不快さへの警戒反応から、過覚醒で身体感覚を解離(麻痺)させてシャットダウンするか、いずれかの防衛機制を用いて対応する。しかし、今回、安全で信頼をおける犬(トムトム)を見て触る経験は、過去の不快な場面から、五感を通した身体感覚を媒体として、中間領域である今ここ、にとどまり、結果的に治療可能領域(逃げずに向き合える領域)に居続けることが可能になった、と推察された。

## 施設職員の生活へのつなぎ手の存在性

施設職員 3 名(施設指導員 2 名(男女)施設心理士 1 名)が、DOG-P には参加して同席していた。訪問心理士、児童、犬、施設指導員、の 4 者が、I-P 場面を共有することはどのような意味をもつのだろうか。

施設職員は、普段の生活における児童らのこと熟知し親役割を果たす存在である。DOG-P において、施設職員は、過去の生育史を語る児童らを見守り、励ましながら静観の姿勢を維持した。施設職員側からの人的身体接触行動は、被虐待児童には脅威を感じるものとなりやすい(杉山, 2010)。これは、過去の不快な暴力や性的侵害などの虐待行為が蘇り、フラッシュバックで、固まる、いきりたつ、暴れるなどの行動のスイッチを押すことになる(杉山ら, 2006)。そこで、児童らがセッションにおいて脅威を感じた時は、施設職員が抱きとめる、背中をさする等、の受容する行動に対しては、児童個人と話し合い「背中さすって 3 回だけ」等、ル - ルを実行した。

一方、施設職員にとっては、児童らの苦悩しながら表現する姿をじかに感じ、その経過を観察する体験だったと想像する。同席することで、児童の行動の意味を深く理解し、慈愛

の気持ちで他の施設職員らに伝達する役割を果たしていた。

毎 DOG-P 終了後には、訪問心理士と担当施設職員らとのコンサルテーションでは、セッション中の表現内容を共有すると共に、負担等も話し合うアフタセッションの時間を設けた。

担当施設職員らは A 施設全体への理解を得るために、繋ぎ手として児童らの生活への橋渡しを担いプログラム全体の安全な枠組みとなった。

#### 事例から学ぶこと

症例 A について考察する。A は大きな眼のはっきりと物事を主張する強さを持っていた。父母からの性的交流の目撃の外傷体験があり、性的興奮がそこそこに飛び出し A の生活を阻害していた。犬(トムトム)は A には、興味深い存在となり、セッション中も随時犬を観察し関わっていた。G-P 初回では、犬(トムトム)を抱擁した際、目を見開き力が適度に抜けて沈黙となった。何が起きたのかを想像すると、ハイテンションで大笑いするなど、脳で性的に興奮して身体がばらばらでいた A が、犬を抱きしめ適度な温度(38.0℃)とさらさらした毛ざわりを感じ、統合した身体感覚を取戻した瞬間であったと推察する。その後呼吸が深くなり活動が継続した。

I-P においては、インタビューや生育史の聴取では父母の虐待内容を犬(トムトム)を横目で見ながら語り続けた。犬(トムトム)の存在が A を DOG-P に引き寄せ、1回のセッション中5、6回は犬の傍にいた。A の犬への対応は、時に「こら～トムトム目つぶすぞ～」とこぶしを振り上げ叩く真似をする実父の表現の再演と考えられる暴言や「かわいい～トムトムちゅ～」とトムトムにキスをしようと口を差し出す等の実母の表現など、両面がフラッシュバックとして表出した。トムトムは A にとり自分自身の投影であり、時に母や父の投影であったと推察する。犬が介在しない心理療法においては、セラピストである訪問心理士に出す表現を犬(トムトム)に表していた。犬が A に受容的な役割をとっていた場面で、訪問心理士は自律制限的な役割をとった。犬が存在することで A に多面的な役割が与えられる機会となった。回が進むにつれて「めんどっち～」と言い抑うつ感や倦怠感を表すが、A はトムトムと会える、と乗り越えた。DOG-P 内で描く絵は当初は、顔や目、身体が欠損している断片的なものであったが、最終回では、犬と散歩しているまとまりある絵を完成させた。犬の存在が、A の過去から未来をつなげ、心細く体験した色を塗り替え、犬の存在を加えた過去の記憶として統合したと考えられた(海野,2013)。

補足であるが、A は終了後、訪問心理士に「あの時はめんどっち～と言っていたけど、本当はすごく楽しかったよ～またトムトムを学園(A施設)に連れて来てね」と手紙を書いた。1年後フォローアップ DOG-P で訪問の際、A

の表現は健康な言い回しになった。また、10年後の未来に好きなことを実行する絵を描く課題では、A 自身が教員となり、子どもに教授する絵を完成させた。「10年後に犬(トムトム)はいない、お星さまになって A を見守っている。ありがとうさよならトムトム」と歌い全 DOG-P は終了した。

DOG-P の経験は、A の生活の一側面でしかないが、集中的に構造化したプログラムが、A の内面の不信感や置き去り感を補完し、犬との愛着を作り、このプログラムを促した施設職員との愛着に繋がったと推察する。

以上、ドッグプログラム(DOG-P)は試行的に実施した。今後、犬の存在で被虐待児童の治療の範囲や可能性がより高まることを期待したい。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

海野千畝子, (2013) 被虐待児童への動物介在療法(ドッグプログラム) 査読無 人と動物の関係学会誌 36巻, pp75-83

海野千畝子, 石垣儀郎, 横井直子, 山本秋子, (2013) 施設におけるアニマルセラピー - 査読無, 日本子ども虐待防止学会誌 pp142-143

海野千畝子, 石垣儀郎, 山口修喜, Eileen Bona, (2013) 被虐待児童への動物介在療法(ドッグプログラム) 査読無 トラウマティックストレス学会誌 12巻, 116p.

〔学会発表〕(計4件)

海野千畝子, 石垣儀郎, 横井直子, 山本秋子, 施設におけるアニマルセラピー - 被虐待児童へのドッグプログラム, 日本子ども虐待防止学会 2013年12月13日信州大学松本キャンパス(松本市)

海野千畝子, 動物介在療法(ドッグセラピー) 日本小児科医会(招待講演) 2013年7月27日国際会議場(神戸市)

海野千畝子, 被虐待児への動物介在療法(ドッグプログラム) 人と動物の関係学会シンポジウム, 2013年6月23日, 県民会館(神戸市)

海野千畝子, 石垣儀郎, 山口修喜, Eileen Bona, 被虐待児童への動物介在療法(ドッグプログラム) 日本トラウマティックストレス学会 2013年5月11日平成帝京大学(東京都豊島区)

〔図書〕(計1件)

井出博, 海野千畝子, 木村優子他4人, 養護教諭のための児童虐待対応マニュアル(2014) 79

〔その他〕

中日新聞 2014年1月14日社会欄 14P に掲載。大見出し「虐待児童にセラピー-犬」小見出し「日進の療育施設：心落ち着き症状緩和」

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

海野千畝子(UNNO, Chihoko)

兵庫教育大学・人間発達教育専攻・准教授  
研究者番号：30584875